

# ビルマ（ミャンマー）仏教徒の生活と信仰

—1998年3月のアンケート調査から—

池 田 正 隆

## はじめに

「ミャンマー」と聞いても、私たち日本人には、東南アジアの国名ということを出すのがせいぜいで、昔はインドの近くにあつて「ビルマ」と呼ばれていた仏教の盛んなバゴダ（仏塔）の沢山あるところ、と答えてくれる人は、それほど多くはないかも知れない。ところが、日本とビルマとは、少し歴史事情を学べば、いろいろと「縁が深い」ことが分かってくる。

私は、かつて大学卒業直後にそのビルマで仏教僧として沙彌と比丘の生活をほぼ3か年経験させていただいた。今回は春休みを利用して学生一人と共に渡緬、民間信仰の調査研究の助言をしながら、私自身も在家の仏教信者の実態を知るべく極めてわずかな時間であったが、調査を試みた。これはそのささやかなレポートである。

## I. 調査概要

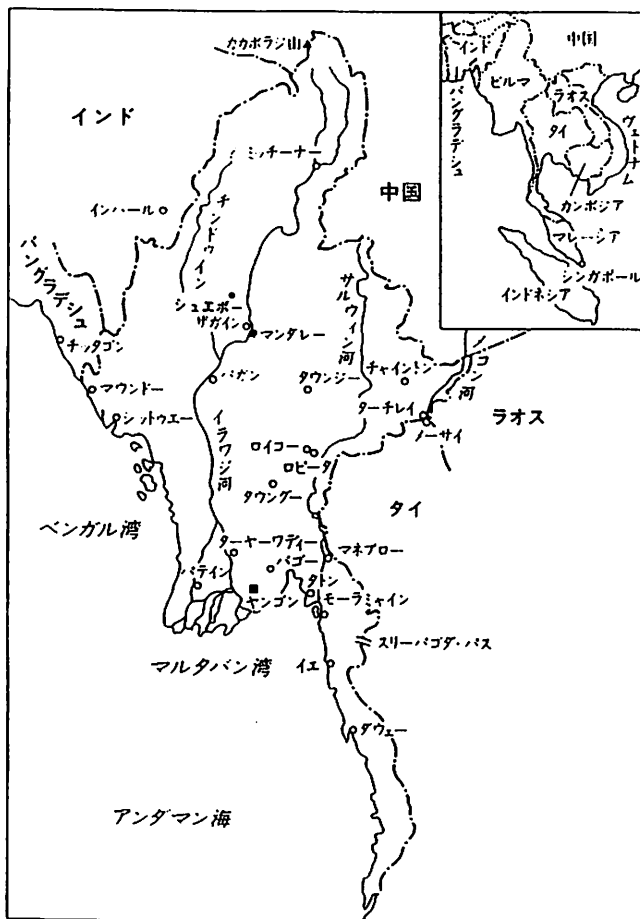
調 査 地：ミャンマー国 ヤンゴン、マンダレイ近郊（タウンピョン、アマラプーラ）シュエポー（略地図参照）

調 査 日：1998年3月10～23日

調査の目的：現在のビルマ人仏教徒の日常生活における宗教意識を知るため

調 査 協 力：現地の友人・知人・宿泊地、滞在休憩地でのアンケート応答者

ミャンマー（ビルマ）全図



質問事項：以下の表に示すビルマ語による9項目の質問であった。

〈「はい」「いいえ」のいずれかをえらぶ質問を主とする〉

1. あなたは、仏教徒ですか。

「はい」 「いいえ」

2. あなたは、布薩日<sup>1)</sup>にお寺（僧院）に行きますか。

「はい」 「いいえ」 「ときどき行きます」

3. あなたは、布薩日<sup>2)</sup>にパゴダへ参詣しますか。

「はい」 「いいえ」 「ときどき行きます」

4. あなたは、平均して一（ひと）月に何度ほどお寺(僧院)に行きますか。

「一（ひと）月に1度」 「一（ひと）月に2度」 「一（ひと）月に3度」 「一（ひと）月に4度」

5. あなたは、お寺(僧院)に行くときに何を持って行きますか。

「食べ物」 「お金(お布施)」 「その他」

6. あなたは、生まれかわりを信じますか。

「信じます」 「信じません」

7. あなたは、31輪廻界<sup>3)</sup>があると思いますか。

「思います」 「思いません」

8. あなたは、次の生存に人間に生まれたいですか。

「人間に生まれたい」 「人間に生まれたいくない」

「なぜですか」 .....

9. あなたは、次の生存に男に生まれたいですか。

「男に生まれたい」 「男に生まれたいくない」

「なぜですか」 .....

名前 : .....

年齢 : .....

帰依対象 : .....

住所 : .....

人種 : .....

注記 1) 布薩日：ミャンマーでは私たちの使う太陽暦と同時に仏教徒は、独自の太陰暦のこよみも併用している。その太陰暦で毎月、出家の比丘は一（ひと）月に2回、満月の15日と晦日の29日あるいは30日、

在家信者には一（ひと）月に4回・陰暦8日、15日、23日、29日あるいは30日の晦日が布薩日がある。すなわち、毎月4回の齋戒日（身と心の行為を慎み、清浄に保つ日）が定められている。

- 2) バゴダ：仏塔（インド起源の仏舎利塔から発展した高い宗教建造物）
- 3) 31輪廻界：スリランカやタイ、ミャンマーなど南方上座仏教徒の世界観で、この世を迷いの世界と捉え、欲界、色界、無色界の三界の中に地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、の5趣、さらに天界にヤマ天、トソツ天など6欲天、大梵天、梵輔天など16の色界、4つの無色界があり、合計31の輪廻の世界を次々と生存が繰り返されているとする。

## Ⅱ. 各質問の意図：

1. あなたは、仏教徒ですか。「はい」「いいえ」

この質問は、単に応答者の仏教徒であるか、ないかを確認するため設定した。

2. あなたは、布薩日<sup>1)</sup>にお寺（僧院）に行きますか。

「はい」 「いいえ」 「ときどき行きます」

これは、多くのビルマ人仏教徒が、布薩日にお寺（僧院）に行くという古来から伝承されてきた慣習があるので、その現状を知るためであった。

3. あなたは、布薩日にバゴダへ参詣しますか。

「はい」 「いいえ」 「ときどき行きます」

これも上記2. の質問同様、バゴダへの参詣状況を知るためである。

4. の問いかけについては、特に説明するまでもないであろう。

5. あなたは、お寺（僧院）に行くときに何を持って行きますか。

「食べ物」 「お金（お布施）」 「その他」

この質問5. は、出家者の日常生活を直接支えている信者たちの様子を知るためであった。答え易いように、との意図で、あらかじめ「食べ物」、「お金（お布施）」、「その他」とし、「その他」には自由に書き込みもできるように、と考えていた。

6. あなたは、生まれかわりを信じますか。

「信じます」 「信じません」

これは、ビルマの人たちが「輪廻する」ことを信じ、死後に生まれかわって新たな人間とか生物となると考え、自分がこの世に生まれる以前の生涯についても関心を抱き問題視する人が多いといわれている点について、実際に現代の

仏教徒がどのように思っているのか、聞いてみたかったのである。

7. あなたは、31輪廻界があると思いますか。

「思います」 「思いません」

上記6. と同じ意図で実際にそう思って生活しているのか、どうか尋ねてみた。

8. あなたは、次の生存に人間に生まれてきたいですか。

「人間に生まれてきたい」 「人間に生まれてきたくない」

「なぜですか」 .....

これは、上記. 6, 7の質問にも関係する問いである。仮に輪廻の考えを肯定、あるいは前提として、仏教徒の彼らが抱いている人間観、人生観の一端でもさぐりたかったからである。

9. あなたは、次の生存に男に生まれてきたいですか。

「男に生まれてきたい」 「男に生まれてきたくない」

「なぜですか」 .....

これも8. の質問と同じく、彼らの抱いている男・女という性別に関する人生観、ひいては社会観・世界観をも反映しているのではないかと考え、あえて問いとした。

### Ⅲ. 集計結果の報告：

回収できたアンケート用紙総数——38枚

アンケート実施地別にすると、

下ビルマ——23枚（ヤンゴン——23枚）

上ビルマ——15枚（マンダレー管区——11枚、シュエポー市内——4枚）

上記のように、ビルマ語で記した質問の用紙（A4サイズ）に回答し記入してもらい返却回収できた数は、38枚である。

従って、いずれの質問事項に対しても集計総数は、無記入を含めて38になるはずである。ただし複数の回答があった事項について、それらをそのまま数に入れて集計したので、総数がそれ以上の数になっている項目もある。

1. あなたは、仏教徒ですか。  
「はい」 38, 「いいえ」 0,
2. あなたは、布薩日<sup>1)</sup>にお寺(僧院)に行きますか。  
「はい」 9, 「いいえ」 4, 「ときどき行きます」 25,
3. あなたは、布薩日にパゴダへ参詣しますか。  
「はい」 10, 「いいえ」 3, 「ときどき行きます」 25,
4. あなたは、平均して一(ひと)月に何度ほどお寺(僧院)に行きますか。  
「一(ひと)月に1度」 16, 「一(ひと)月に2度」 4,  
「一(ひと)月に3度」 4, 「一(ひと)月に4度」 5,  
[記入なし 5]
5. あなたは、お寺(僧院)に行くときに何を持って行きますか。  
「食べ物」 19, 「お金(お布施)」 14, 「その他」 12 (供物など) [記入なし 2]
6. あなたは、生まれかわりを信じますか。  
「信じます」 33, 「信じません」 5,
7. あなたは、31輪廻界<sup>2)</sup>があると思いますか。  
「思います」 36, 「思いません」 1, [記入なし 1]
8. あなたは、次の生存に人間に生まれてきたいですか。  
「人間に生まれてきたい」 28, 「人間に生まれてきたくない」 10,  
「なぜですか」 ..... (記述内容は後記して紹介)
9. あなたは、次の生存に男に生まれてきたいですか。  
「男に生まれてきたい」 30, 「男に生まれてきたくない」 8,  
「なぜですか」 ..... (記述内容は後記して紹介)  
名前, 年齢, 信仰, 住所, 人種(年齢, 信仰, 人種に関しては後記)

#### Ⅳ. 集計結果の分析：

1. の質問に対して38人全員が仏教徒であると答えている。仏教徒のみにアンケート用紙を配布したわけではないので、たまたま私が応答を依頼した人た

ちがそうであった、ということにすぎない。

ちなみに、ミャンマーの1983年の統計によれば、仏教徒は89.4%で圧倒的多数であり第1位、2位がキリスト教徒で4.9%、イスラム教徒3.8%、ヒンドゥー教0.5%、その他1.3%となっている。

2. の布薩日にお寺に行くか、という質問に対して、9人が「行く」と答え、25人が「ときどき行く」と答えており、両方を併せると総数の約89.5%がお寺の僧たちと強い結び付きを保っていることがわかる。「行かない」と答えた人が38人中の4名で、約10人に一人強となっている。

3. の布薩日にバゴダに参詣するか、という項目でも、10人の38%が「参詣する」と答え、25人の「ときどき参詣する」とを合わせると35人で、約92%の仏教徒が布薩日つまり毎月、1回から4回バゴダ参りをするというのである。

このアンケートの問い2. と3. との結果を比較すると、ミャンマーの現在の上座仏教徒は、どちらかといえば「僧院」よりも「バゴダ」との結び付きがより強い、と言えるかもしれない。しかし、このアンケートで見える限り、その差はごく僅かであり、何れにしろ、ミャンマー仏教徒は、バゴダおよび僧院へ毎月何回かは足を運んで礼拝したり供養をしている様相をうかがうことができる。

4. の「あなたは一(ひと)月に何度程お寺(僧院)に行きますか」という問いに対する答えで、未記入のものが5枚あり、それらは「何回かと尋ねられても返答に困る」「この選択欄では即答できない」ということであったかと考えている。

以上のような未記入5を含め合計34の答えの中で、16名約47%の人が一(ひと)月に一度寺に行く、と答えている。4名、約10.5%の人が2度、同じく4名の方が3度で、一(ひと)月に4度、つまり布薩日(8日)毎にお寺に行く、と答えている人が5名あり、全体の約14.7%に当たる。

5. では、そうしたお寺を訪ねる信者が何を持って行くかを調べてみた。上記のように、それらの集計結果は、一人が2つあるいは3つにチェックしたのもそれぞれ数えて、「食べ物」19、「お金(お布施)」14、「その他」13(供物

など) [記入なし2]であった。

チェックの総数は48で、「食べ物」、「お金(お布施)」、「その他」のすべてにチェックしたものが3枚、それら3項目中の2つにチェックしてあったものが4枚あった。

この結果をみると、「食べ物」が最も多く総数の約40%、寄進する「お金」は総数の約29%で、出家僧の毎日の食事を支え、生活必需品購入のための現金を布施すべく持って行く人も3割ほどもいることが分かった。

その他には、「寄進物」との記入が多く、「僧院15日間の生活必需品」を持参するという人もいた。

6. 「あなたは生まれかわりを信じますか。」という問いであるが、生まれかわりに相当するビルマ語に「タマルンパーワ」をあてた。それは「来世、あの世(死後の世界)」を指し、緬英辞典でも「next existence, future state of existence」を意味する。

「信じる」と答えた人が38人中33人で、全体の92%以上であった。

私は、かって35年以上も以前にミャンマーに滞在していたとき(1957~60年)に、たまたま知り合いになったビルマ人が、ある別の人を指して「彼は誰々(過去に逝去した人)のうまれかわりだ」と真顔で言うので、驚いたことが一度ならずあったことを思い出す。ビルマ人の中には、現在でもそのように信じる人が少なからずいるのではないか。実は、そうしたことまで知りたかったが、今回はそこまで調査に踏み込めなかった。

なおこの点に関しては、NHKスペシャル『ブッダ大いなる旅路(2)―篤き信仰の風景・南伝仏教』(石井米雄監修、日本放送出版協会) pp. 74-75に、前世を記憶するチャー・ス・マ、およびその現世と前世との両家族の写真などが紹介されているので参考までに付記しておく。

7. 「31輪廻界」については、上に注記した通りであるが、38名中36名が信じており、仏教信者の殆どが「自分たちは31の輪廻する欲界の中の存在である」ことを承知しているようである。なお、理由不明ながら、無記入と「信じない」と答えた者もそれぞれ一人ずついた。



8. 「次の生存に人間に生まれてきたいか、どうか。」という問いであるが、これには38名中28人が生まれてきたいと応え、10名が人間に生まれることを望まないと答えている。ここでは「それは何故ですか。」と、その理由を聞いてみた。

次の生存に人間に生まれたい理由：〔(○)は同様の答えが複数あることを示す。〕

- ① 人間(だけ)は、善行功徳を積み涅槃に到達するために努力できる(尊い、得難い近い)存在だから。(○)
- ② 他の輪廻界は、苦があり怖いから。
- ③ 仏・法・僧にもっとも近いから。
- ④ 輪廻界のもっとよい処に生まれたいから。
- ⑤ 両親に恩返しをしたいから。
- ⑥ 今の人生でおこなってきた善行の功徳が、まだ少ないから。

次の生存では人間に生まれたくない理由：

- ① 人間界は複雑で悪いことばかりに満ちているので。
- ② 人間にあきれた(愛想をつかした)ので。
- ③ 心配の多い輪廻界で迷ってしまいたくないので。
- ④ 人間界は苦悩に満ちているので。(○)
- ⑤ 輪廻界を出たいので。(○)

人間に再び生まれたいと希望する者は、それまでにつちかわれてきた仏教の世界観の中であって、さらに涅槃の彼岸を目指そうとして前向きの姿勢を示している人が殆どのものである。他方、人間に生まれたくないと答えている人は、苦悩に満ちた生活に愛想をつかした、いやもう絶望して、もう嫌だと考えているのであろうか。

9. 「あなたは次の生涯で男に生まれたいですか。」という質問であるが、アンケートに答えてくれたのは、男性19名、女性19名で偶然にも半数ずつであった。

男性の応答者 19名中 男性に生まれたい ————— 16名

男性に生まれたくない —— 1名

どちらにも生まれたくない — 2名(8番の  
質問に「人間に生まれたくない」と答えた1名  
および「輪廻から解脱したい」と答えた1名)

女性の応答者 19名中

男性に生まれてほしい ————— 14名

男性に生まれたくない —— 4名

どちらにも生まれたくない — 1名(8番の  
質問に「人間よりよい処に生まれてほしい」と答え  
た1名)

その理由:

女性の応答者で、「男性に生まれてほしい」と答えた人の理由

- ① 男性のほうが尊いと自分は思うから。(○)
- ② 男性は威力があるから。(○)
- ③ 男性は、ブツダになるよう祈願できるから。
- ④ 比丘式を受けられるから。
- ⑤ 比丘になって布教活動ができるから。
- ⑥ 男性だけが比丘になれて涅槃に到達できるから。
- ⑦ 仏教の後継ぎになりたいから。
- ⑧ ブツダの子として修行できるから。

女性の応答者で、「男性に生まれたくない」と答えた人の理由

- ① 輪廻界の苦しみを逃れたいので。(○)
- ② 輪廻界にある苦しみが怖いので。
- ③ それ以上によりよい処に行きたいので。

男性の応答者で、「男性に生まれてほしい」と答えた人の理由

- ① 威力があり尊いと思うから。(○)
- ② 男性はブツダになれる存在だから。(○)
- ③ ブツダになるよう祈願したいから。
- ④ 男性になると尊いし比丘になれるから。

- ⑤ 男性は誰のことも気にかけず怖がらないで生活できるから。
- ⑥ 男性だけが沙彌や比丘になり、ブッダになる祈願をすることができるから。
- ⑦ 男性が女性より色々なことができるから。
- ⑧ 比丘になり布教できるから。
- ⑨ 女性は、生理・妊娠があり、細心でものごとを決め難い。そういう女性に生まれたくないの。
- ⑩ 男性のほうが情緒的な女性よりも真理探究にむいており、その力も強いと思うので。
- ⑪ 男性は女性にある出産の苦しみがなく、心も身体もしっかりしていて、尊い仏教活動をするのに効果的なので。

男性の応答者で、「男性に生まれたくない」と答えた人(1名)の理由  
——輪廻することを恐れるから。

#### V. アンケート応答記入者について

- (1) 年齢
  - 10代(10～20歳) —— 3名
  - 20代(21～30歳) —— 7名
  - 30代(31～40歳) —— 4名
  - 40代(41～50歳) —— 10名
  - 50代(51～60歳) —— 12名
  - 60代(61～69歳) —— 2名
- (2) 種族
  - A. 下ビルマ(ヤンゴン) 23人中
    - ビルマ族 —— 18名
    - ビルマ・中国(混血) —— 2名
    - ビルマ・シャン(混血) —— 2名
    - モン族 —— 1名
  - B. 上ビルマ15人中(マンダレー、アマラプーラ、トウンピョン、シュエポー)
    - ビルマ族 —— 11名

## ビルマ・シャン(混血) — 4名

### ま と め

ミャンマーの仏教徒、といっても在家信者の信仰心について、その一端でも知りたいと考えてのアンケート調査であった。「まとめ」としたが、とくに私見を加える必要はないと思う。

ただ、アンケート記入をしてもらった場所については、たまたま知人の協力があった(ヤンゴン、シュエポー)とか、そこで時間的余裕があった(トンビョン、アマラプーラ)ということにすぎない。トンビョンチー村(マンガレー管区)、アマラプーラ(ウンドゥイン市)は、どちらにも、近くにナッ・コン(精霊を祀る祠堂・社殿)が存在し、精霊信仰者の多い地区で、そこを私たちが訪ね、その際に出会った人たちの協力によるものであった。

現在のミャンマー政権下で、公的なアンケート調査をするには当局の許可が必要であることは承知していた。しかし今回は20日間程のミャンマー滞在で旅行計画も諸事情(学生の指導と資料集めなど)のため立てられなかったこと、また、アンケート調査といっても政治とか経済あるいは治安に関係するようなことではなく、仏教徒の日常生活についてのことであったので、あらためて許可申請はしなかった。

アンケートを実施しているときに、何処でも誰からも注意されたり不満をもらされたりしたこともなかった。

こうしてビルマ人仏教徒の信仰生活の内実を知らされると、あらためて日本人ひいては自分自身の生活状況あるいは信仰心のありようを考えさせられ、内心忸怩たる思いであった。

ところで、今年1998年4月10日NHKスペシャル「ブッダ大いなる旅路」第2回目で「篤き信仰の風景・南伝仏教」が放映され筆者も監修として協力した。それは、ミャンマーとタイの生きた仏教信仰の実態を包み隠しなく現代社会を写しとるなかで紹介するものであった。

このアンケート調査の結果は、こうした映像を見ていただくことによって、

さらに何程かを語りかけてくれるかもしれない。

## 謝 辞

このアンケート用紙作成段階におけるビルマ語、および帰国後のビルマ文字の判読に関して、ヤンゴン大学文学部を卒業し現在大谷大学大学院修士課程在学中のビルマ人留学生 ミャミャチーさんにご協力いただいた。末尾ながら明記して謝意を表す。

—1998年10月10日記—